

2023 年度第 4 回研究会（通算第 15 回目）

•日時：2023 年 12 月 23 日（土）13:00–17:00

•場所：オンライン会議室

•共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」,
東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

日本語、歴史コーパスおよびバントウ諸語に関して、3 名のメンバーが口頭発表し、意見交換を行なった。日本語は、「このラーメン、うまっ!」のような「イ落ち構文」について、歴史コーパスは、コーパスから得られるデータと頻度が意味すること、コーパスを利用する際の注意点などについて、主にスワヒリ語の使役起動交替の類型論について、発表者の話題提供をもとに、異分野どうしの相互理解を深める機会となった。

1. 林渚紗 (Risa Hayashi; 津田塾大学)、中山璃子 (Riko Nakayama; 津田塾大学)、佐藤陽介 (Yosuke Sato; AA 研共同研究員, 津田塾大学)

「日本語のイ落ち構文再考：時制のない T, 出来事の証拠性と発話行為句」

(The Japanese Adjectival Conjugational Ending Drop Construction Revisited: Tenseless T, Eventual Evidentiality and Speech Act Phrase)

日本語の口語体で使用されるいわゆる「イ落ち構文」の新たな分析を提案した。この構文については、今野(2012, 2017)の主節小節分析 (root small clause)が提案されている。本発表では、まずその問題点を指摘した上で、今野の代案として、この構文の派生は時制のない T と Speech Act Phrase をもとにした豊かな機能範疇を含む構造を持つことを主張した。この分析によると、当該構文において多重主語と遊離数量詞が可能であること、否定辞が（今野の一般化に反して）原理的には生じうること、埋め込み節では生起できないこと、そして最大の特徴として「イ落ち構文」が話者の現在の目の前の対象物や事象についての瞬時的直感や判断を表す私的発話であるといった、様々な構造的・機能が自然な形で導き出されることを示した。最後に、この構文と右方転移構文との特徴の類似をもとに、両者が根本的に発話節 (Utterance Phrase)レベルの言語現象であるという指摘を提示した。

2. 柳 朋宏 (Tomohiro Yanagi; AA 研共同研究員, 中部大学)

「英語史的統語論においてコーパスから分かること・分からないこと」

(What to Obtain and Not to Obtain from Corpora in English Historical Syntax)

本発表では、生成文法理論と通時的言語研究におけるコーパスの位置付けの違いに触れ、頻度と文法性との間に関連性はないといわれている一方、文法性の判断は話者の言語経験に大きく依存するという考え方もあることを指摘した。また、英語史的統語論の研究では、

現代英語と各時代の英語との違いを常に意識する必要があることを指摘した。特に綴字と語義は現代英語と異なる場合が多いため、慎重に分析しなければならないと論じた。さらに、コーパスに基づく言語研究では、粗頻度ではなく調整頻度を用いてコーパス間の比較をすることが一般的だが、総語数に基づく算出される調整頻度は語の比較では有効である一方、構文の比較では誤った傾向を示す可能性があることを示した。そこで、構文の通時的な変化や作品間の違いを比較するには、節や文の総数に基づいて算出する調整頻度の方が妥当であると提案した。

3. 米田信子 (Nobuko Yoneda; AA 研共同研究員, 大阪大学)

「スワヒリ語の使役起動交替」

(Inchoative-Causative verb alternations in Swahili)

Haspelmath (1993)は、対をなす自動詞と他動詞の派生関係を、①無標の自動詞から他動詞が派生する使役化型 (causative)、②無標の他動詞から自動詞が派生する脱使役化型 (anticausative)、③同じ語幹から自動詞と他動詞の両方が派生している両極系派生型 (equipollent)、④自動詞と他動詞が同形の自他同形型 (labile)、⑤自動詞と他動詞の語根が異なる自他異形型 (suppletion)の5つに分類している。本発表では、この分類を用いながらスワヒリ語の自他交替の派生関係について以下のことを報告した。

- Haspelmath (1993)は、スワヒリ語には自他交替の派生関係に明確な傾向が見られないと結論づけているが、これは通時的音変化を考慮していないからである。
- スワヒリ語には $k+y \rightarrow sh$ (spirantization) という通時的音変化が起きている。これを考慮してスワヒリ語の自他ペアを見ると、スワヒリ語には明確な使役化型の傾向が見られる。
- この傾向は、ヘレロ語やマテング語といった他のバントゥ諸語と比較しても明確である(したがって「使役化型」という傾向はバントゥ諸語に共通する傾向というわけではない)。
- 自動詞が表すイベントの自発性が高いほど自動詞は形態的に無標であるという Comrie(2006)の仮説に対して、Comrie は Haspelmath(1993)のデータからスワヒリ語を「例外」と結論づけているが、通時的音変化を考慮したデータはスワヒリ語も例外ではなく、むしろ彼の仮説を裏付ける結果となる。